

JRC/全日本ラリー選手権

第7戦 ラリー北海道

2022年も TOYOTA GAZOO Racing を PIAA はサポート

勝田範彦選手・木村裕介選手組がラリー北海道を制し、大会2連覇を達成！



奴田原文雄選手・東駿吾選手組が2位、鎌田卓麻選手・松本優一選手組が4位に入賞！

OP-XC2 クラスでは FLEX SHOWAIKAWA Racing with TOYO TIRES をサポート



■概要/Outline

国内外のレースシーンをサポートする PIAA はラリー競技においても長年にわたりサポート。WRC（世界ラリー選手権）では TOYOTA GAZOO Racing WRT を筆頭に、数多くのワークスチームをサポートしてきたが、国内最高峰シリーズの JRC（全日本ラリー選手権）においても 1982 年に横浜ゴムと ADVAN-PIAA Rally Team を結成して以来、アドバンのワークスドライバーとともに数々のタイトルを獲得している。

そのサポート体制は 2022 年も数多くのサポートチームおよびサポートドライバーが最高峰の JN1 クラスで活躍している。JN1 クラスに2台のトヨタ GR ヤリスを投入する TOYOTA GAZOO Racing で、勝田範彦選手・木村裕介選手組が第3戦の久万高原ラリーを制覇。さらにチームメイトの眞貝知志選手・安藤裕一選手組も第5戦のモンレーで2位入賞を果たしており、最高峰クラスでキャリア初の表彰台を獲得したことは記憶に新しい。



さらに自身のチーム、NUTAHARA Rally Team の GR ヤリスで参戦中の奴田原文雄選手・東駿吾選手組も抜群のパフォーマンスを見せており、第2戦のツール・ド・九州で2位に入賞した。



一方、WinmaX RALLY TEAM でスバル WRX STI を駆る鎌田卓麻選手・松本優一選手組はマシントラブルが頻発したことから、ポディウムフィニッシュこそ果たせていないが、好タイムを連発するなど持ち前のスプリント能力は健在である。



スバル WRX STI の鎌田卓麻選手のスタート



四駆ならではの豪快なコーナリング

JN5 クラスに目を向ければ、MATEX-AQTEC RALLY TEAM でトヨタ・ヤリスを駆る小濱勇希選手・橋本美咲選手組が第5戦のモンレーを制するほか、同じく MATEX-AQTEC RALLY TEAM でトヨタ・ヤリス CVT を駆る渡部哲成選手・佐々木裕一選手組が第6戦のラリー・カムイを制覇した。



まさに 2022 年も PIAA ユーザーが躍進しているが、第7戦のラリー北海道でも素晴らしいパフォーマンスを発揮していた。とくに JN1 クラスでは 2021 年のウイナーである勝田選手が大会 2 連覇を達成し、シーズン 2 勝目を獲得したほか、奴田原選手が2位につけ、最高峰クラスで 1-2 フィニッシュを達成。さらに惜しくも表彰台を逃したが、鎌田選手も4位につけるなど上位入賞を果たした。一方、JN5 クラスでは渡部選手、小濱選手ともにコースアウトでリタイアしたものの、それでも好タイムを連発している。



これに加えて OP-XC2 クラスには FLEX SHOW AIKAWA Racing with TOYO TIRES が注目を集めており、ドリフト競技で活躍する川畑真人選手がトヨタ・ランドクルーザー・プラドで参戦したほか、モータージャーナリストとして活躍する竹岡圭選手がトヨタ FJ クルーザーで豪快なドライビングを披露するなど、2022 年の JRC においても各クラスで、PIAA ユーザーたちが最前線で活躍しているのである。



D1 ドリフトのレジェンド川畑真人選手がプラドを！



TV でもお馴染みのジャーナリストの竹岡圭選手が FJ クルーザーを！

■レポート/Report

2022年のJRCでもPIAAのサポートチーム、サポートドライバーが各クラスで活躍。なかでも最大の注目を集めているのが、トヨタのワークスチーム、TOYOTA GAZOO Racing だといえるだろう。WRCでTOYOTA GAZOO Racing WRTをオフィシャルテクニカルパートナーとしてサポートするPIAAは、JRCでも国内ワークスチームのTOYOTA GAZOO Racingをサポート。同チームは昨年と同様に勝田範彦選手、眞貝知志選手をドライバーとして起用しており、GRヤリスを武器に素晴らしいパフォーマンスを発揮している。



ナイトセッションがあれば活躍するLEDバーランプ



コロナ禍ということもありSSが短縮され性能発揮する場面が・・・

2022年は福永修選手に加えて、2021年のJN2クラス王者、ヘイッキ・コバライネン選手がシュコダ・ファビア R5でJN1クラスに参戦していることから、国内規定モデルを投入するTOYOTA GAZOO Racingは厳しい戦いをしいられているが、それでも勝田が開幕戦の新城ラリーで3位、第2戦のツール・ド・九州で3位につけるほか、第3戦の久万高原ラリーではシーズン初優勝を獲得。その後も勝田選手は好調で第4戦のラリー丹後で3位、第6戦のラリー・カムイで3位につけるなどポディウムフィニッシュを達成している。さらにJN1クラスへの参戦が2年目となる眞貝選手も安定した走りを披露しており、第5戦のモンレーではサバイバルラリーを走り抜き、2位でキャリア初の表彰台を獲得した。

このように2022年のJRCではTOYOTA GAZOO Racingの2台のGRヤリスが躍進しているが、NUTAHARA Rally Teamの奴田原文雄選手もGRヤリスを武器に第2戦のツール・ド・九州で2位に入賞。一方、WinmaX RALLY TEAMでスバルWRX STIを駆る鎌田卓麻選手はマシントラブルなど度重なるハプニングで本来の実力の成績を残せていないが、それでもスバル勢の一角として好タイムを連発するなど持ち前のスピードは健在だ。



凄まじい土煙を上げて爆走するGRヤリス



車検日にLEDバーランプを仮にセッティングしました



これに加えて JN5 クラスでは MATEX-AQTEC RALLY TEAM が躍進している。トヨタ・ヤリス CVT を駆る渡部哲成選手が新城ラリーで3位、ツール・ド・九州および久高原ラリーで2位につけると、トヨタ・ヤリスを駆る小濱勇希選手がラリー丹後で2位に入賞。さらにモンレーでは小濱選手が1位、渡部選手が2位につけると、ラリー・カムイでは渡部が1位、小濱が2位につけるなどシーズン2回目の1-2 フィニッシュを達成した。



このように 2022 年の JRC でも PIAA ユーザーが各クラスでトップ争いを左右しているが、第7戦のラリー北海道でも躍進していた。

今年で 21 回目の開催を数えるラリー北海道は 9 月 9 日～11 日、北海道帯広市を舞台に開催。2022 年の大会は帯広駅前でラリーショーやセレモニアルスタートが開催されたほか、スペシャルステージやサービスパークも人数を制限しながらも観客を動員するなど華やかな雰囲気で開催された。

そのなかで素晴らしい立ち上がりを見せたのが奴田原選手で、GR ヤリスを武器に SS1「RIKUBETSU LONG1」でベストタイムをマーク。さらに奴田原選手は SS3「NUPRIPAKE 1」でも SS ウインを獲得する。しかし、この日の主役となったのは GR ヤリスを駆る勝田選手で SS5「YAM WAKKA2」でベストタイムをマークし、総合順位でもトップに浮上。勝田選手はこの日の最終ステージとなる SS7「NUPRIPAKE 2」でもベストタイムをマークし、後続に 12.6 秒のマーヅンを築いてレグ1をフィニッシュした。

2 番手は SUBARU TEAM ARAI でスバル WRX を駆る新井敏弘選手で、前走車のダストで視界を塞がれた奴田原選手が新井選手に遅れること 0.1 秒差の 3 番手でレグ1を走破。ターボのパイプトラブルでトップから 36 秒も離されはしたものの、鎌田選手も 4 番手でレグ1をフィニッシュした。

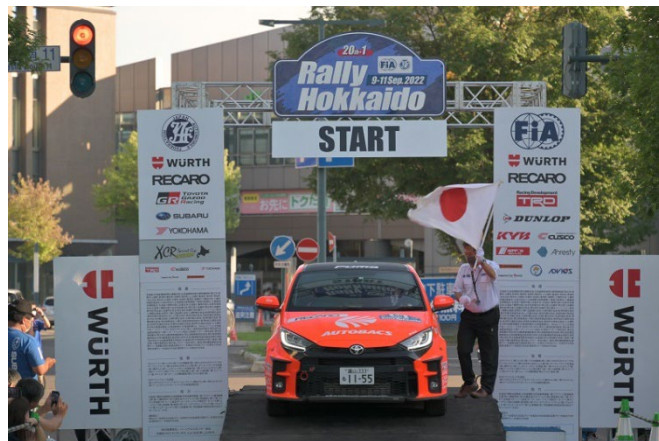
明けた翌日のレグ2では、この日のオープニングステージとなる SS8「OTOFUKE REVERSE1」で奴田原がベストタイムをマークし2番手に浮上。続く SS9「PAWSE KAMUY REVERSE1」では新井選手がベストタイムをマークして2番手の奴田原選手とのギャップを0.4秒差まで詰めよるなど「新井選手 vs 奴田原選手」の構図で激しい2番手争いが展開された。

この背後のポジション争いを尻目に勝田選手は余裕の走りでポジションをキープ。今季2勝目を獲得した

ほか、大会 2 連覇を達成した。

一方、白熱した 2 番手争いを制したのは最終 SS となる SS10「OTOFUKE REVERSE2」でベストタイムをマークした奴田原選手で、これにより PIAA ユーザーが 1-2 フィニッシュを達成。

残念ながら勝田選手のチームメイト、眞貝選手はコースアウトを喫し、レグ1でリタイアしたものの、鎌田選手が4位に入賞したほか、ARTA オートバックスラリーチームの石川昌平選手も6位に食い込むなど、多くの PIAA ユーザーが最高峰クラスで上位入賞を果たした。



また JN5 クラスでも MATEX-AQTEC RALLY TEAM が素晴らしい走りを披露。モンレーを制した小濱が SS1「RIKUBETSU LONG1」、SS2「YAM WAKKA1」、SS3「NUPRIPAKE 1」でベストタイムを叩き出すなど 3 回連続で SS ウインを獲得した。

しかし、続く SS4「RIKUBETSU LONG1」で小濱選手はコースアウトを喫し、リタイアした。代わって躍進を遂げたのがラリー・カムイを制した渡部選手で SS5「YAM WAKKA2」、SS7「NUPRIPAKE 2」でベストタイムをたたき出し、レグ1を 2 番手でフィニッシュした。

渡部選手は SS8「OTOFUKE REVERSE1」でベストタイムをマークし、首位に浮上したものの、最終ステージとなる SS10「OTOFUKE REVERSE2」でコースアウトを喫し、勝利を目前にしてリタイアに終わる。残念ながら JN5 クラスは 2 台揃ってフィニッシュを果たせなかったが、持ち前のスピードを見せていた。

そのほか、ラリー北海道では XCR スプリントカップが同時開催されており、OP-XC2 クラスに数多くのクロスカントリーモデルが参戦。なかでも注目を集めていたのが、PIAA がサポートする FLEX SHOWAIKAWA Racing with TOYO TIRES にほかならない。同チームは文字どおり、哀川翔監督が率いるラリー チームで、ドリフト競技で活躍する川畑選手がトヨタ・ランドクルーザー・プラド、モータージャーナリストの竹岡圭選手がトヨタ FJ クルーザーで素晴らしい走りを披露していた。



残念ながら川畑選手はレグ1でコースアウトを喫し、デイリタイヤすることとなったが、竹岡選手がOP-XC2 クラスで2位に入賞。本格クロスカントリー車両のコーナリングは迫力満点で、多くのファンの関心を集めていた。プラドは中央自動車大学の学生とFLEX 札幌店の協力でデイ2に復帰しました！

このように2022年もJRCでPIAAサポートチームが活躍しており、常に上位争いを展開しています。
(ラリー北海道終了時点)

◆PHOTO GALLERY



セレモニアルスタートは帯広駅前



大勢のファンが沿道で声援を送りラリーが戻って来ました



帯広駅前通りをラリーカーがスタートしていきます



スタート前にはラリーショーが開催されサイン会なども



奴田原選手、東選手もラリーショーでサイン会



ランエボ時代からヤリスになってもPIAA製撥水ワイパーを愛用



FLEX SHOW AIKAWA Racing は哀川翔監督、キマってます！ D1ドリフトの川畑選手、ジャーナリスト竹岡圭選手がドライブ
マシンメンテナンスは中央自動車大学の学生が頑張ってます！（先生も）



PIAA 製 LED ランプ装着 (DK575BWG)



ボンネットに LED CUBE ランプ (DKQE39E)



ブレードにも LED CUBE ランプ



バンパーには LED バーランプも



FJのヘッドライトにはPIAA製LEDバルブ (LEH180)



屋間のラリーでもLEDバルブが白く光ってます

